

07

July
2026

[月刊] キリスト教書評誌

本のひろば

HON-NO-HIROBA

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2026年7月1日発行(毎月一回1日発行)

第823号

出会い・本・人

「その本を、まだ捨てられず」 徳田 信

特集シリーズこの三冊!

日本の宣教を考えるに資する、この三冊! 濱 和弘

本・批評と紹介

勝村弘也 著

V T J 旧約聖書注解 サムエル記上 16 ~ 31章 竹内 裕

山我哲雄 著

V T J 旧約聖書注解 列王記下 3 ~ 14章 矢田洋子

吉田 新著 聖書翻訳と宣教 遠藤佳那子

嶺重 淑 著

今さら聞けない!! キリスト教 新約聖書の祈りと倫理編

筒井信行

柳田敏洋 著 私とは何者か 桑原直己

川中子義勝 著

ドイツ・コラールの詩人たち 釘宮明美

深澤 奨 著 持つて生まれたことばを生きる ^{ロゴス} 辻 学

日本クリスチャンアカデミー関西セミナーハウス活動センター編

「戦争の時代」にしないために 西原美香子

深澤 奨 著

エフエソの信徒への手紙を読もう 奥田知志

宮本久雄 著

宮本久雄著作集2 キリスト教思想 袴田 玲

宮本久雄 著

宮本久雄著作集3 エヒイエロギア 阿部善彦

平野克己、吉村和雄 編

神の喜び、ここに始まる 朝岡 勝

石原吉郎と安西均

5月22日



柴崎聰著

戦後詩に大きな足跡を残した両者は戦時下に受洗したキリスト者だった。二人の共通点と相違点を探りながら彼らの詩業の核心に迫った力作評論。 四六判・定価2420円

シュライアマハー

その生涯と思想

5月22日

ヘルマン・フイツシャー著／伊藤慶郎訳

批判的校訂版全集と近年の研究成果に基づき、伝記上の重要な出来事、および神学と哲学に及ぶ膨大な著作の全体像を概観する最新の評伝。 四六判・定価2970円



ビリー・グラハム

ひとりひとりの魂と向き合った伝道者

3月25日



大群衆に獅子吼する大衆説教者。冷戦期に歴代大統領に影響を与えた祭司的預言者。一人一人に向き合う牧者。その複雑な素顔に迫った評伝。 四六判・定価5390円

帝国の神道とキリスト教

3月25日

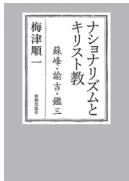
洪伊杓著 近代日本のキリスト者における神道理解と社会思想

神道との融合を図った海老名弾正の思想とその影響を丹念に辿る。 A5判・定価7700円

ナシヨナリズムとキリスト教

梅津順一著 蘇峰・諭吉・鑑三

平民主義から帝国主義に転向した徳富蘇峰を福沢・内村と比較した論考集。 四六判・定価3080円



ツインツェンドルフの神学

4月24日

エーリヒ・バイロイター著／梅田與四男訳 敬虔主義の核心をめぐる

彼のキリスト論、三一論、聖書論、宣教論、信仰論などを解明する。 A5判・定価5390円

聖書翻訳と宣教

吉田 新著 日本語訳聖書関連資料の研究

2月25日

口語体から文語体、そして再び口語体へと変化していった文体の変遷に注目し、膨大な資料に基づいて先人の労苦の跡を辿り、狭義の言語論を超えて宣教論の観点から新たな翻訳論を切り拓く。 A5判・定価6600円





その本を、まだ捨てられず

徳田 信

春に教会を移り、住まいも変わった。しかし、本棚はいまだ段ボールのままである。箱の側面には「神学」「説教」などと書かれ、中身のおおよその見当はつく。けれども、なかなか開けることができない。正確に言えば、開けても、以前のように読められないのである。多くは、屋根裏に放り込んだ。

以前の私にとって、読書は自分を前に進めるための営みだった。線を引き、余白に書き込み、説教や講義へとつなげる。読むことは世界を理解し、自分を少し賢くしてくれる営みだと思っていた。本棚は、そうした歩みの記録でもあった。

ところが最近、数ページ読んでも意味が頭に残らないことがある。ふと気づくと、同じ箇所を何度も目で追っている。若い頃に夢中で読んだ本を開いても、今の自分には少し遠い。かつて引いた線や書き込みも、別の誰かの筆跡のように見えることがある。

それでも、不思議と手放せない本がある。学部時代、仲間と

背伸びして読んだヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。信仰と言葉の結びつきを教えてくれた恩師たちの本。何度も読んだはずなのに、今になって別の箇所の手が止まるナウエン。ページをめくると、若い頃の線が少し濃すぎると感じた。あの頃の私は、何をそんなに急いで理解しようとしていたのだろう。

疲れている時、人は、あまり整いすぎた言葉を受け取れないのかもしれない。励ましの言葉でさえ、すぐには心に入ってこないことがある。ただ、自分より先に立ち止まった人の言葉だけが、辛うじて手元に残る。

片付かない段ボールの前で、ときどき一冊だけを取り出しては、数ページ読んで、また閉じる。本を読むとは、本当は、前に進むための営みではなかったのだと思う。

その本を、私はまだ捨てられずにいる。

(とくだ・まこと 日本キリスト教団高の原教会牧師)



▼シリーズ この三冊！

日本の宣教を考えるに資する、この三冊！

濱 和弘

(はま・かずひろ) 日本ホーリネス教団小金井福音キリスト教会、
相模原キリスト教会牧師)

遠藤周作は、終生カトリックの信仰を生きましたが、それでもキリスト教に対して「合わない洋服」と評しています。

私はプロテスタントの牧師ですが、似たような感覚を持つことがあります。それは東日本大震災の時です。地震の直後の被災地に入った際に、がれきの山の前にしゃがみこんでいた初老の男性の後ろ姿を見て、私は言葉を失いました。というのも、この人に、私が信じ語って来た「神は愛です。神は、

あなたの罪を赦すために、キリストを、十字架で死なせるまでに、あなたを愛している」という言葉が、虚しく、力がない現実には気付かされたからです。私はうちのめされ、ただ無力感だけが残りました。いったい私は、キリスト者としてどのような言葉をかけられるのか？

この時の経験は、拙書『人生のすべての物語を新しく』（教文館）に詳しく書いてありますが、この経験を境にして、私は、私が信じていた信仰を、

徹底的に見直す作業に入りました。その結果が『傘の神学Ⅰ 普遍啓示論』・『傘の神学Ⅱ 特殊啓示論』（共にヨベル）という著作です。

その背景には、現代日本の宣教と教会形成における行き詰り感があります。何よりも、圧倒的な苦難や苦悩、そして苦しみの中にある人に届く言葉をもっていない現実があります。そのことをあの東日本大震災の経験は、私に突き付けてきたのです。

そこから、日本人の心に届く福音の言葉の模索が始まりました。それは、新しい日本の宣教の言葉の模索でもあります。ここでは、その模索に示唆を与える三冊をご紹介します。

その最初の一冊は、田島照久・阿部善彦編著『テオ・シス——東方・西方教会における人間神化思想の伝統』（教友社）です。

この本は、十五名の研究者の論文集

ですので、若干、難しさや読み辛さを感じるかもしれませんが、丁寧に読み進んでいくならば、本来のキリスト教が持つ救いの豊かさに、触れることができるでしょう。

テオシスとは、「神化」と訳される救済論の一つですが、一言で言うならば、人間が神になるという思想です。もちろん、神そのものになるわけではありません。神の恵みによって、永遠の命や神の聖・愛といった神の性質に与ることです。そしてその根幹には、人間は、神の像に造られたという創造の出来事があります。

西方教会の伝統では、救いの内容を、罪の赦しを中心に理解してきました。その根幹には、人間は生まれながらの罪びとであるという人間理解があります。そして救いの構造は、堕罪―贖罪―十字架という構造です。そのため、神化というキリスト教の真髄ともいえ

る思想は、わずかに神秘主義に見られる以外には、ほとんど触れられることは、ありませんでした。

しかし、東方教会の伝統（正教会）に今も脈々と継承されています。そこには、人間は神の像に造られているがゆえに、神の似像になるという救いの理解と、創造―受肉―神化という救いの構造があります。

私たち日本人の精神性の中には、人が神となるという感覚が深く根差しています。菅原道真（天神様）の事例や、現在でも、優れた技術を持った人を「神」と称したり、優れた行動を「神対応」と言ったりします。このように、日本人の感覚は、「神化」という思想になじみやすいのです。

もっとも、「神化」は、努力によって獲得するものではなく、神が私たちと共におり、私たちと交わりを持つてくださる中で、私たちの内に起こる動

的な変化です。私たちが、神が私たちと共にいるという事実が気付く時、私たちの生の在り方を根底から変えるダイナミックな救いの出来事を見い出すことができます。また、生きる意味や意義、そして目標と力を見いだせるのです。そのキリスト教の真髄をこの『テオシス』という本は、深く、教示してくれるのです。

二冊目は八木誠一著の『宗教の行方——現代のための宗教十二講』（法蔵館）です。

八木は、自らの神学思想を「宗教哲学」と呼び、「より善い生き方」「より善い生の在り方」を探索します。この本は、まさにその「宗教哲学」が表されたものです。

八木は、この本の中で、人間の生を表層・中層・深層の三つの層で語ります。表層は、私たちの日常の生活の層であり、中層は神の意思が、イエスに

において実現している「神の支配」の層であり、深層は、この世界の全てを包摂する超越者たる神の層です。

表層における人間の日常は、人と人との関係によって築かれています。そこには、自分の利益や欲望を満たすために、他者を虐げる現実があります。

八木は、そのような生き方は、人間の本来の自然な生き方ではないといいます。そして、人間の自然な生き方は「神の支配」が人格化したキリストに現れているということです。つまり、「神の支配」は、キリストと人との関係によって築かれる世界なのです。

この中層の世界の秩序は、私たち人間の心に湧き上がる愛によって導かれます。そして共生と平和を産み出します。だからこそ、表層にある生き方から、本来の自然な生き方に移るこの大切さを本書は訴えるのですが、このような主張は、先の神化に通じる

ものです。そして、深層は、そのような表層と中層を含めて世界の全てを、超越である神の内に包み込みます。

この八木の神学思想の枠組みは、西田幾多郎の哲学です。まさに、日本的神学の一つのモデルが、『宗教の行方』に示されているのです。

ここまで私は、『テオーシス』で救済論を日本人的感覚に、『宗教の行方』で、キリスト教的生き方を日本の哲学に繋ぐ書を挙げてきましたが、最後に日本人の霊性に関する書を紹介したいと思います。というのも、宣教は、知的な説得だけではなく、神との生命的な結びつきへと導いて完結するものだからです。

そこで、その試みに最適な書として、金子晴勇著『東西の霊性思想——キリスト教と日本仏教との対話』（ヨベル）を挙げたいと思います。

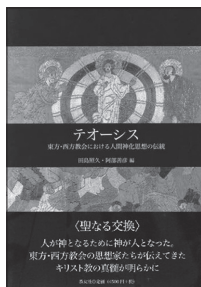
この書は、西洋の中で育まれたキリ

スト教の霊性と、日本人の霊性の接点を探求した書です。

この四月に逝去した金子は、西洋キリスト教思想史の大家です。同時に、歴史家の視点でキリスト教における霊性を研究してきました。本書ではディオニシオス、アウグスティヌス、ルターが取り上げられ、後者においては、空海、法然、親鸞、道元、白隠といった人物の霊性を取り上げられます。

金子の霊性理解は、基本的に神秘主義的現象の中に現れる神との合一の経験にあります。いわば、「神、我らと共にいます」というインマヌエルの出来事の実存的経験です。

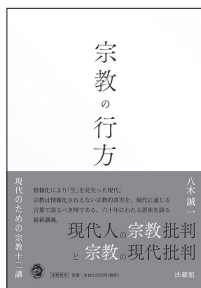
もちろん、仏教の世界に、インマヌエルという言葉などありませんが、日本人の豊かな霊的感性は、自然を通して超越的存在を感得し、自然との一体感の中で超越的存在との結びつきを感じ、経験してきました。



『テオシス——東方・西方教会における人間神化思想の伝統』

田島照久、阿部善彦：編著
教友社
2018 年刊
A5 判
551 頁
4,950 円

このような、霊的感性は、鈴木大拙によって自己と自然に沈潜することによっての悟りに至る禅思想を核とする日本の霊性として認識されていますが、金子は、この様な霊性は、思惟によって被造世界から魂を離脱させ、そこにおいて神を認識し、神との合一を目指すエックハルトの思弁的神秘主義に結びつくということです。そして、そこに共



『宗教の行方——現代のための宗教十二講』

八木誠一：著
法蔵館
2022 年刊
四六判
382 頁
3,520 円

通するキリスト教的霊性と日本的霊性の接点となる恩寵経験を見いだしているのです。実際、先出の鈴木は、禅仏教の研究者でありつつエックハルトの研究者でもありますので、金子の主張は、的を射ていると言えるでしょう。このような、超越的存在と一つに結ばれるという経験は、日本の感覚と日本的知性（哲学）によって捉えたキリ



『東西の霊性思想——キリスト教と日本仏教との対話』

金子晴勇：著
ヨベル
2021 年刊
四六判
288 頁
1,980 円

スト教を統合し、生命的な息吹にあふれた日本的キリスト教としての宣教の言葉を生み出す土台となるのではないのでしょうか。そのような言葉に紡がれたキリスト教は、もはや「合わない洋服」ではなく「ぴったりと合った和服」ではないかと思っています。

愉しき知恵に満ちた旧約註解

〈評者〉
竹内 裕



VTJ 旧約聖書注解
サムエル記上 16～31章
勝村弘也著



本書はVTJ (Vetus Testamentum Japonicum) 旧約聖書注解シリーズの一書を成し、表題の示す通り、サムエル記上巻の後半部分(16～31章)、すなわちサムエルによるダビデの塗油からサウルの死まで、を翻訳、分析、考察するものである。

サムエル記は一つの古代王国成立の顛末を記述するものだが、一読すれば分かるように、多くの生き生きとしたエピソードを収め、読者の心はときに踊り、ときに胸が締めつけられ、歴史書という乾いた呼称で言い表すには似つかわしくない。戦闘、逃亡、術策が繰り返されるなかで、若者の友情、老いゆく者の焦燥、嫉妬、寛大さ、義侠心、忠義、裏切り、怯え、猜疑、絶望、錯乱など、人の心の多様な襞を示す物語に溢れ、聖書を紐解く者に格別な楽しめと洞察を与えてきた。

この物語の森をたしかな足取りで自ら歩み、その豊かな緑の陰影へと誘う案内人として、著者の勝村氏以上にふさわしい学究かつ文章家がいるだろうか。

繊細な言語感覚によって選び取られた訳語、紙背に徹する眼差しの鋭さと確かさ、本文校訂や釈義における古今の資料への目配り、諸説の吟味に際しての冷徹で抑制の効いた判断。そうしたいわば職人仕事の腕の冴えにまず唸らされる。堅固で学的良心に貫かれた記述を読み進み、汗牛充棟の聖書学において数節の釈義に要する時間と思案の膨大さを想いつつ、これだけの良質の註解を書き通す偉業に書評子は感嘆するばかりである。

本註解シリーズのうちにあって本書が際立つのは、狭義の聖書学の枠を超えた洞察と議論の充実だろう。それはとりわけ、単元が示唆する主題を広く文化的な文脈あるい

は現代社会において切実な問いと交錯させて展開する「解説／考察」部分や「トピック」の随所に見られる。これがじつに自由闊達で、愉しく、面白い。

王国成立の社会背景を説くにあたって地理や経済や農学等における蓄積を緻密に検討することは必須であるとしても、鉄槍の重さを吟味する際に陸上競技の知識と経験が動員され、慈愛（ヘセド）の語義を洞察するときに相撲部屋の人間関係が参照され、嘘つき話の考察に「かちかち山」の民話からナチスへの抵抗運動の倫理学、アビガイルの贈り物に関しては社会学者モースの贈与論、サウルが頼る霊媒についての考察ではイタコについて記す詩人の言葉を、ゴルヤトを倒すダビデについてチャップリンの映画やミケランジェロのダビデ像を引き合いに出し、堅琴（キンノー

ル）の形や響きについて語る際には宮沢賢治を引きつつ著者自身の音楽への造詣までもが活かされている。

こうした豊かな参照項は勝村氏が優れた人文学的学究であると同時に、文学と音楽と思想と共同体と生き物への尽きない愛情を湛えながら人生を味わい尽くす温かい人、つまり二重の意味でのヒューマニストであることをありありと示すものであると私は思う。氏の聖書学には生活と芸術があり、ひいては生き生きとした身体があると言えるのかもしれない。

かくも均衡が取れて堅実であり、通読味読に耐える愉しき知恵に満ちた註解書が日本語で刊行されることを心より寿ぎたい。

（たけうち・ゆう＝熊本大学大学院教授
（A5判・四二四頁・定価七二六〇円・日本キリスト教団出版局）

神学ダイジェスト140号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にある、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2026年6月発行
A5版120頁
定価638円（税込）

特集 今日のカトリック倫理神学

AI技術の規制——執事としての管理責任——
倫理的行為者としての集団
良心と根本的選択

教皇フランシスコの技術主義パラダイム批判

AI倫理学のために
性に関する罪と聖体拝領

古代理スラエルにおける民主化プロセス

秋葉 悦子
J・F・キーン
竹内 修一

W・オニール

P・シャーツ

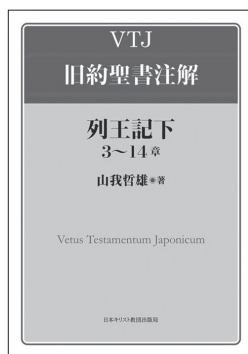
R・W・マケロイ
K・シュミット

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

列王記を読む

すべての人への「宝物」

〈評者〉 矢田洋子



VTJ 旧約聖書注解
列王記下 3～14章
山我哲雄著



本書は、山我哲雄先生による列王記注解の四巻め、VTJ 旧約聖書注解シリーズの二三巻めです。このシリーズを立ち上げた日本キリスト教団出版局が大幅に事業整理される寸前、二〇二六年三月二五日に刊行されました。

著者の山我哲雄先生は、言わずと知れた旧約聖書学の泰斗です。数えきれないほどの著書と翻訳書を世に送り出してくださっていることは皆さんご存じでしょう。これまでに日本旧約学会の会長を通算三期（六年間）務められ、会長講演は三回とも列王記関連でした。そんな著者の列王記注解ですから、信頼できること間違いなし。読んでみると期待以上のさまざまな恵みが与えられました。これも「日本語で書き下ろす聖書注解」の効果でしょう。

本書の特徴の一つは、平易で歯切れの良い日本語で書かれていることです。私がそれに気づいたのは、この紹介文

を書くために本書を最初から最後までざっと読んでみたときでした。「詳しい注解書」なのに、いちいち確かめなくても、理解が追いつかないままでも、なぜか無理なく嬉しく読み進めることができたのです。読みやすい日本語のリズムに乗せられて。すると、宝物がたくさん！ 疑問は氷解し、無意識に抱いていた思い込みや、気づかずにいた御言葉、新しい視点を発見しました。自然に、列王記の御言葉について「いろんなこと」を考えます。

本書が扱う列王記下3～14章は、南北王国並立時代の後半に関する箇所です。北王国でも南王国でもクーデターが起こった激動の時代です。預言者エリシャの物語が大きな部分を占めます。5章に記されたアラムの將軍ナアマンを癒やす物語は、ルカ福音書でも紹介されています。

著者は扱う聖書箇所を二〇単元に分け、それぞれを丁寧

に解説します。それぞれの【注解】には、旧約聖書本文（ヘブライ語原典）を正確に読み取ろうとする中で、語彙などの意味を決めていく過程が、その根拠や不確かさの度合も含めて記されています。著者はテキストの間に見えてくる様々な矛盾や多様性に注目して、それを編集史的方法で読み解き、編集層それぞれの時代の思想とその変遷を明らかにする研究をされています。ですから不整合には敏感で、意味の見極めは慎重です。日本語訳で聖書を読むだけでは得られない、多くの気づきが与えられます。

重要な語彙の解説も丁寧です。特に秀逸なのはナアマン物語における「ツァーラアト（重い皮膚病、規定の病）」についてのものでしょう。聖書本文の歴史的、文化的背景に示唆を与えるものとして、聖書外資料も積極的に紹介さ

れており、【解説／考察】では「メシヤ碑文」「黒オベリスク」「テル・ダン碑文」などが詳しく解説されます。

注解の狭間には、現代の問題について考えさせらえる、刺激的な記述もあります。たとえば、クーデターの背後に宗教的イデオロギーを想定し、王朝交代クーデターの北王国には儒教的「易姓革命」、ダビデ王朝復興クーデターの起こった南王国には、天皇家の「万世一系論」的思想があつたのだという具合です。最初はほんとかなど思つたものの、言われてみれば確かに……？

とにかく本書は、列王記の御言葉で思索や黙想をしたいすべての人におすすめです。

（やだ・ようこ＝東京神学大学特任常勤講師）
（A5判・四〇〇頁・定価七〇四〇円・日本キリスト教団出版局）

ヨベルの新刊 / 近刊案内



話題の新刊

国家存亡の危機の時代に生み出されたヘブライ語のアルファベット詩「哀歌」。七十人訳ギリシャ語に移し替えられた時、それはどのように変容していったのか。聖書翻訳の限界を探究することが真の叙智と人間理解への最良の手引きともなり得ることを渾身の和訳を通して明らかにする。

A5判上製・一四四頁・一九八〇円

小河信一〔著〕原典ヘブライ語と七十人訳の比較分析

七十人訳ギリシャ語・哀歌の和訳

大韓聖公会 全国女性聖職者会〔著〕 私たちの司祭 共に歩き出す



反響

韓国聖公会の歴史において女性が按手礼を受け司祭となるのはまさに茨の道。司牧の現場でも差別と偏見、冷遇と拒絶は今なお絶えない。それでもイエスのいのちのパンを人々と分かち合うために私たちがこの道に召された。歴史と宣教の主体である女性たちによって綴られた現代韓国の教会史。

四六判・二二四頁
近刊 一八七〇円
関澄子訳

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F

TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

出版の手引き / 呈 (税込)

聖書翻訳に刻まれた 日本のキリスト教

〈評者〉 遠藤佳那子



聖書翻訳と宣教

日本語訳聖書関連資料の研究

吉田 新著



本書は副題に「資料の研究」とあるが、その内実は本邦における「聖書翻訳の歴史」および「キリスト教宣教の歴史」の研究にほかならない。そしてそのどちらの文脈においても本書は画期点となるだろう。それは副題のとおり、堅実な「資料の研究」によって成し遂げられたものである。本書の意義として、評者は特に次の二点を強調したい。第一に新資料の紹介とその基礎的研究に先鞭を付けた点、そして第二に、聖書翻訳史を「宣教」という観点から描写してみせた点である。

聖書翻訳の研究には文献学的研究が不可欠であるにもかかわらず、手稿類やそれに関する研究が少なく、その点で隔靴搔痒の感が否めなかった。これに対し、本書ではこれまで等閑視されてきた資料群を中心に置き、ギュツラフ訳から共同訳聖書まで各時期の教会の動向や社会状況を整理

しつつ翻訳の歴史を記述してゆく。第一章ではマラン手稿、第二章では「三要文」を、第三章から第五章では、日本聖書協会に保存されていた大正改訳稿本や戦時下の改訳原稿、口語訳聖書や共同訳聖書に関わる翻訳資料を手がかりに、どのような過程を経て訳文が練り上げられたのか検証されている。特に大正改訳以降の資料群が初めて研究の俎上に載ったことは、著者の大功として評価されなければならない。

なお具体的な訳文の考察を行う際には、どうしても日本語そのものの国語学的な知見が必要となる。それにもかかわらず評者の専門分野である国語学では宗教書であるという理由などから、聖書の訳文に踏み込むことを敬遠するきらいがある。本書では、日本語の用字法や振り仮名の役割、本邦における「文体」の歴史的沿革や問題点など、国語学

の分野で厚い研究の蓄積がある事項についての確にその勘所が押さえられており、その点でも信頼の置ける論考となっている。

一方で、具体的に迫れば迫るほど特定の語や節の訳出に焦点が絞られ、ともすれば局所的かつ個別的な挙例の寄せ集めになりかねない。では網羅的に全編の悉皆調査をすれば大局的な実態や傾向が見出されるのかというと、そうとも限らないものである。しかしながら本書は聖書翻訳の営みに一貫して「宣教」という目的があることを喝破し、それを主軸に据えることで、文体史の枠組みにとどまらない聖書翻訳史の叙述を実現させた。起点テキストと目標テキストの狭間に数多ある「正しさ」の中から選ばれた訳は、まさしく当時の教会や社会状況を前提に選り取られた宣教の

あり方である。翻訳の移り変わりは、すなわちキリスト教宣教のあり方の歴史だということである。

本書で翻訳関連資料が検証されたことによって、各時期の訳文の成立背景が示されただけでなく、協会主導の翻訳が決して単線でなかったことも示唆された。社会に流布した主要な翻訳を繋いで紡いだ聖書翻訳史が稜線なら、本書の描き出したものは稜線を支える山肌の複雑な起伏である。キリスト者たちが模索し、格闘しつづけてきた聖書翻訳の具体そのものの姿であり、彼らが目指した宣教の姿である。

(えんどう・かなこ 鶴見大学准教授)
(A5判・三三六頁・定価六六〇〇円・新教出版社)



みんなのカテキズム

アメリカ合衆国長老教会*著
ヘイスティングス監訳
田中かおる・神代真砂実訳



アメリカ合衆国長老教会
1998 年次総会で認定され
た「教理問答」
現代のプロテスタント教会
におけるカテケーシス
(信仰育成)のための確かな
手引き。

A5 判・並製本
定価 1,980 [本体 1,800 + 税] 円
ISBN978-4-900666-46-7



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

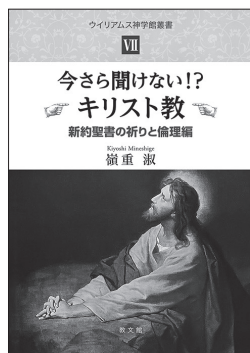
聖書の深い理解をもたらし、 読者の視界を開く必読の書

〈評者〉 筒井信行

さまざまな場で熱心に聖書を学ぶ方々にお会いします。主日礼拝や聖書研究会はもちろん、講演会や講義にも通い続ける姿に、いつも頭が下がる思いがします。そうした「もっと深く聖書を味わい、学びたい」と願う人にとって、本書はまさに必読の書です。

神学部に在籍していた頃、私は著者である嶺重淑教授の新約聖書学の講義を数多く受講しました。講義は分かりやすく、レジュメも整理され、分からないまま終わることがありませんでした。学生からの「突飛な質問やコメント」にも先生は笑顔で応答し、時に鋭く問い返すこともありました。分かりやすさや楽しさ、明るさの中にも程良い緊張感もあり、九〇分があつという間に過ぎ去る感覚でした。

その講義のエッセンスが、本書『今さら聞けない！キリスト教——新約聖書の祈りと倫理編』にも反映されていて



ウィリアムス神学館叢書Ⅳ
今さら聞けない!?

キリスト教

新約聖書の祈りと倫理編

嶺重 淑著

ます。「祈りと倫理編」とありますが、開いてみると第一部は「愛する」。日本語では「愛」と一語に訳されますが、ギリシア語には様々な愛（アガペー、エロス、フィリア、ストルゲー等）が存在します。著者は新約聖書に特有のアガペーの愛の特質を、A・ニーグレンの理解に基づき、エロスの愛との比較から説明しています。それによるとエロスとは「価値を求め、自己を充足させるが上昇的な愛」であり、アガペーとは「価値とは無関係に他者へ与える下降的な愛」であり、アガペーとエロスは対照的愛であることが分かってきます。

このように本書では、豊富な参考文献や諸説を引用してギリシア語の語彙やテキストを解説します。また、図や表が随所に配置され、脚注が本文と同じページに収められているのでスムーズに読書が進みます。様々な学説を紹介し



ながら議論が進むため、自然と視野が広がっていきます。諸説を挙げつつ反論も示され、読み進めるにつれて理解や知識が深まり、読者の視界は開けていくことでしょう。

本書の構成は、第一部でイエス、ルカ、パウロ、ヨハネの四者の「愛理解」が、第二部では同じく四者の「祈り理解」に加え、マタイ版、ルカ版の「主の祈り」を比較しつつマタイ版の「主の祈り」が解説されています。内容を学んで理解した上で、今後も「主の祈り」を祈ってまいりたいものです。第三部ではイエス、パウロ、ルカ、ヤコブ書の富理解や財産倫理が同じく丁寧に解説されています。このように、同じ聖書の中の「愛」や「祈り」「富」でありながらも、イエスや各書の著者によって共通点と相違点があることが明らかにされていきます。複眼で書かれた多様

な理解が並存するからこそ、聖書の持つ豊かさに読者は気づかされていくことでしょう。

イエスの教えの中に「敵をも愛せよ」との有名な教えがあります。著者はこの御言葉を丁寧に解説し、トルストイ、ガンディー、マーティン・ルーサー・キングといった歴史上の人物がどのように受容してきたのかも紹介します。その上で著者の見解をも示しています。ウクライナやガザ地区等で、今この瞬間にも血が流されている現実を前に、「では、あなたはどのように生きるのか？」との問いの前に私達は立たされます。その問いに答えるためにも本書を羅針盤として、多くの人に熟読していただきたいと願います。

(ついつい・のぶゆき) 日本キリスト教団吹田教会牧師
(A5判・二三六頁・定価一九八〇円・教文館)



神の目にあなたは貴い

「ユースにおくる!」生きるための道しるべ

久野牧*著
HISANO Nozomu



混沌の度合いが深まり、平和や自然の破壊が深刻さを増し、さらにAIがさまざまな領域で力を発揮している時代の中で、なお神の言葉(聖書)に聴き続けることはどれだけの意味があるのか? 本書はその問題意識に立って、ユースに向けて語りかける小説教集である。

A5 判変型・並製本
定価 1,980 [本体 1,800 +税] 円
ISBN978-4-86325-173-1

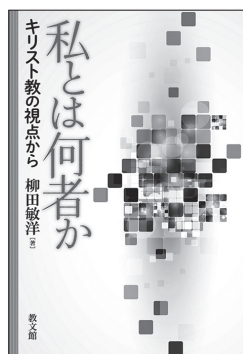


株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

無条件の愛に生きる

〈私〉を知る喜び！

〈評者〉 桑原直己



私とは何者か

キリスト教の視点から

柳田敏洋著



著者、柳田敏洋師はカトリック教会内の有力な修道会であるイエズス会の霊性「霊操」指導の第一人者であると共に、上座部仏教由来のヴィッパサナー瞑想を霊操に導入することにより、キリスト教霊性と仏教との統合ないしは対話の最前線に立つ人物でもある。

著者はまず、近現代哲学の方向に対して鋭利な検討を展開している哲学者永井均に依拠して、様々な記述により特定されて経験的対象世界の中で通用している私を「私」（カギ括弧の私）と表記し、眼が眼自身を見ることができないように対象化が原理的に不可能な私を〈私〉（ヤマ括弧の私）と表記して区別する。著者は、「特に科学技術に信頼を置く現代人にキリスト教理解を深めて」もらおうという自らの意図を明言している。近代以降隆盛を極め現代に及んでいる経験科学は、近現代哲学の基盤の上に成立して

いる。著者の永井への依拠は近現代哲学との対話姿勢を示している。〈私〉は、経験的な対象世界の中には無い限りで対象世界を超越していると同時に、経験的対象世界（及びこれを記述する経験科学）の成立そのものをその根底において支えている。著者は、「自由落下の法則」を例にとって自然科学的探究の根底には探究者（測定者）の〈私〉の自己同一性が前提されていることを示す。また、近年発達著しいAIと人間との差異について、「AIには〈私〉が無い」と言う形で明快に答えている。

次いで著者は、「超越の〈私〉」の根拠を論理的に導き出すこと「はできないことを認めつつ、「信仰という跳躍を行い、神の存在を認め、超越の〈私〉を神から理解し、そこから現象世界の「私」を理解していく」ことにより、「より統一的、包括的に私と他者と世界を理解することが

可能に」なると主張する。

その上で著者は、「私」と「我」との区別をトマス・アクイナスの存在論と重ねて行く。トマスは「神は自存する存在そのものであるDeus est ipsum esse per se subsistens」と神を定義する。「存在」と訳される「エッセ esse」は「ある」を意味するラテン語動詞不定法現在形である。他方、エッセの現在分詞中性形である「エンス ens」は「存在者」「存在するもの」と訳される。エンスの領域は経験の対象世界の全体に対応する。エンスである「私」は、経験諸科学が描く自己保存本能に支配されたエゴを特徴とする人間である。他方著者は、トマス研究の泰斗山田晶に依拠して、エッセを「現実存在する者の、その本質によって規定されたすべてのはたらきをも含蓄している」とする。エンス

の世界のあらゆる存在者は、「エッセそのもの」である神のエッセの限定された分有として、その存在者の本質によって現実世界に存在する。「私」(人間)は、エンスであるにもかかわらず、超越の「私」という本質をもつがゆえに「エッセへの開け」をもつ。また、神は「エッセそのもの」であるがゆえに、神は無条件の愛そのものの、「アガペ」である。

本書において、概ね以上の理論的な枠組みを通して、著者が取り組むヴィッパサナー瞑想が、自己に最も身近な「身体」のレベルにおいて「私」の中に「私」を見てゆく実感を研ぎ澄ます営みであり、「アガベの人」となるための道であることが見通されている。

(くわばら・なおき) 筑波大学名誉教授

(四六判・一五〇頁・定価一四三〇円・教文館)

黙想シリーズ

聖書 聖書協会共同訳

日々の黙想

今ここに 気付く

150の祈りと瞑想

各黙想に、
聖書の言葉と
瞑想の実践法を掲載
対象中学生から

神と共に自分自身でいるために
クリスチャンのための
マインドフルネス実践入門



著者

NEW



アイリーン・クレイゲル 著
(心理学者)

合成皮革装・スリーブ入

天地175×左右110mm 360頁

税込価格 2,640 円

ISBN978-4-8202-9294-4



JBS 日本聖書協会

■お求めは全国のキリスト教専門書店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
<https://www.bible.or.jp>



バッハ音楽の源流となった コラール詩人たちの系譜

〈評者〉 釘宮明美



ドイツ・コラールの詩
人たち
J・S・バッハに耳傾けつつ
川中子義勝著



本書はルター派の讃美歌、すなわちルターを創始とするドイツ・コラールの宗教改革期から敬虔主義の時代に至るまでのコラール詩人たちの系譜を辿る。副題に「J・S・バッハに耳傾けつつ」とあるように、彼らのコラールがバッハの楽曲にどのように生かされているかがコラールの全体像とともに解き明かされる。

取り上げられるコラール詩人は、M・ルターに始まりJ・ヨナス、N・デーツィウス、N・ヘルマン、S・ハイデン、P・シユペラトウス、ブランデンブルク公アルブレヒト、J・グラーマン（以上、宗教改革期）、A・ロイスナー、J・レオン、M・シャリング、Ch・クノル、V・ヘルベルガー、Ph・ニコライ（以上、宗教改革に続く時期）、J・ヘールマン、P・ゲルハルト、J・リスト、M・フランク、J・フランク、J・ノイマルク（以上、三十年戦争

期）、S・ローディガスト、J・ネアンダー（以上、敬虔主義の時代）。いずれも文学史の中では顧みられることが薄く、評者も初めて知る詩人が多かった。しかし、その豊かな宗教詩の伝統には瞠目するばかりであり、「言葉の真実がもつ力」の淵源に立ち返るよう促される。

バッハの音楽を鑑賞するとき、曲に身を委ねるだけでなくその素晴らしさを味わうことができるが、著者は特に歌詞に着目し、「言葉」と不可分なバッハ音楽の詩的・造形的な構築性を指摘する。「歌を通して神のみ言葉が人々の内に臨むように」というルターの根本精神に立ち戻りつつ、コラール原典や聖句の引照箇所について、著者の比喻を借りれば「切り出されて美しい台座に嵌め込まれた石が、いかなる岩場から見出されたか」を源流に遡るように掘り当てていく。それによって先人たちの積み重ねてきた詩と信

日本における聖書普及
事業150年記念出版

旧約聖書 詩篇

四訳対照

文語訳 口語訳
新共同訳
聖書協会共同訳

歴代の聖書を、
詩篇で読み比べ、
味わってみませんか。



ハードカバー・ケース入

天地210×左右210mm
文字の大きさ約8ポイント
厚さ29mm 422頁

定価 **3,960円**

(本体 3,600円 + 税10%)
ISBN978-4-8202-4276-5



JBS 日本聖書協会

■お求めは全国のキリスト教専門書店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
<https://www.bible.or.jp>



仰の世界が、幾重にも生起する「言葉」の出来事の動態として立ち現れる。

例えばバツハが二二歳時の作、カンタータ第一〇六番「神の時こそいと良き時なれ」。詩編九〇編に呼応したJ・レオンのコラル「わがことは神に託せり」の旋律が器楽だけで暗示的に用いられ、さらにルターのコラル「平和と喜びもてわれは往く」の第一節が歌われ、最後にJ・ロイスナーのコラル「主よ、汝にわれ望みを置けり」が斉唱される。死と罪に縛られた人間の魂が福音を告げるキリストの「言葉」に出会って神に受け止められ、新しい命を生きる希望へと変えられる。苦難と困窮の只中で神の恵みに出会った「われ」は、救われ解放された喜びと感謝を「われら」の神への共同体の信仰告白として神を賛美する。

先人に生じた聖書の「言葉」との出会いが自己の内面で受け取り直され、新たな「言葉」の出来事が創出されていく。

身体性を伴う音の響きに霊の息吹を感じ取る著者の言葉と身体をめぐる繊細な洞察は、長年にわたるJ・G・ハーマン研究に裏打ちされている。著者は「聖書詩学」を志向する詩人としても知られるが、本書の底流には詩における伝統と革新、さらには人間が現実を生きる基盤となる共同体と個の関わりについて現代を省みての問題提起があることを看過してはならないだろう。現代仮名遣いを用いた著者独自の美しい文語訳も味わいたい。

(くぎみや・あけみ 〓 白百合女子大学カトリック教育センター教授
(A5判・三五八頁・定価四九五〇円・教文館)

「過激で危険な書物」を 読み解く講解説教

〈評考〉 辻 学



持つて生まれたことば^{ロゴス}
を生きる

ヤコブ書 試訳・註・メッセー
ジ

深澤 奨著



聖書の言葉が時空を超えて我々に生き生きと語りかける
とは、こういうことかと思わされる読書体験だった。

本書は、深澤奨牧師（日本キリスト教団佐世保教会）に
よる、ヤコブ書の連続講解説教を基にした一冊である。従
来このように集中して取り上げられることも少なく、また、
とくに第二章一四節以下が顕著に示すパウロ批判のゆえに、
扱いにくい文書とされ、ルターが「藁の書簡」と呼んだこ
とでも有名なヤコブ書と著者は正面から向き合い、その舌
鋒鋭いパウロ批判、教会批判、そして当時のローマ帝国が
生み出した社会状況への批判を存分に語らせている。

それを可能にしているのは、著者自身の持つ鋭い批判的
視座であることが、各段落の最初に置かれた試訳と語釈か
らも見えて取れる。深澤氏は、辞書や聖書語句索引を丁寧に
参照しつつ、ヤコブ書の「溢れる反骨精神を汲み取って翻

訳」しようと試みる。「聖書協会共同訳のようにお行儀よ
く訳し直してやるのはかえって（ヤコブ書の）著者に失
礼」だからである（二八頁。協会共同訳への批判は随所に
見られる）。

深澤氏によれば、パウロ批判は前述した第二章一四節以下
（信実と行為）だけでなく、ヤコブ書全体に繰り返し現れ
る。「わがきょうだいたちよ、あなたがたはやたらと教師
になつてはならない」（三・一。ここでも聖書協会共同訳
が批判されている）とは、「やたらと教師風を吹かせ、し
かも自分はただの教師どころか、使徒としての地位にあ
わしい存在であるとか、大きなことを吹聴して権威を笠に
着ている」パウロ大先生への反感の現れだし（一一三頁）、
「今日か明日、ここの町に出かけて行こう。そして1年間
かけて商売をして一儲けしよう」と言う者たち（四・一

三」とは、当時の地中海世界における経済状況の中で儲けまくる人々を指す表現であると同時に、そこにはローマ帝国内の町々を移動して信者を「儲けて」いたパウロへの批判も込められていると深澤氏は見る。

「持つて生まれたことばを生きろ」とは、ヤコブ書のメッセージを実地的に言い当てた表現だと思う。一章二——二二節を深澤氏は、「すべての人間には生まれながらにして世界の理であるロゴスが備えられている。それを受け入れよ。それを存分に発揮せよと著者は言う」と読み解く（しかし教会はこの言葉を、伝道によって人間の心に「植え付けられた御言葉」と誤読してきた）。人はみな、小さいもの、弱いものを愛おしみ、守ろうとする神の御心を生まれながらにして持つている。それをヤコブ書の著者は、

ストア哲学の用語を借りて「ロゴス」と言い表す。そのロゴスを実践して生きることこそが求められているのであり、そうならない現実をパウロとその教会、また教会の背後にある古代ローマ帝国の社会に見たがゆえに、このような厳しい批判を展開しているというのである。

丁寧な翻訳と釈義が、まるでヤコブ書と深澤氏が一体となつて語っているかのような迫力に説得力を加えている。著者は、無牧になつてゐる教会の礼拝でこの本が用いられるよう願つてゐるとのことだが（二一七頁）、果たして我々は、「正統派の教会から見れば、過激で危険な書物」（二二三頁）であるヤコブ書を切れ味鋭く説き明かす、この講解説教をきちんと受け止められるだろうか。

（つじ・まなぶ 広島大学総合科学部教授
（四六判・二二四頁・定価一八七〇円・ヨベル）

ヨベルの新作 / 既刊案内



主イエスと共に！主の共同体と共に！
西福岡キリスト教会牧師に赴任し、週報に掲載したコラムが一冊の本に。日々の暮らし、牧会者体験の中から、現代社会の最前線に身を置いたヒトリヒリとした肌感覚から……「キリスト者の人生はイエスと共にある旅路である」という「共に」の視点から紡がれた神のことば。 四六判・二七二頁・一八七〇円

朴清民 [著] (日本ホーリネス教団 西福岡キリスト教会牧師)

主イエスと共に歩む旅路



持つて生まれたことばを生きろ
ヤコブ書の深澤氏
話題の新作
パウロ大先生を正面切って批判する過激で危険な書物が新約聖書に紛れ込んでいた!? それが薬の書簡と呼ばれた「ヤコブ書」。著者はギリシア語聖書本文に肉迫する（私訳、試訳）を丹念に行つた上で、この書の魅力と隠された使信を丁寧に掘り起こす。 四六判・二二四頁・一八七〇円

深澤 奨 [著]

持つて生まれたことばを生きろ

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

暴力の連鎖に抗する 信仰のかたち

〔評者〕 西原美香子

本書は、日本クリスチャンアカデミー関西セミナーハウス活動センターが2024年4月から2025年1月まで開催した修学院フォーラム、シリーズ「戦争と平和」の講演録と2023年12月の関連講演録をもとに編集されたものである。世界各地で武力紛争が続き、日本でも安全保障や軍備をめぐる議論が高まる中、国際秩序の揺らぎや不安が深まっている中で、本書はキリスト教の立場から「戦争の時代にしないために、私たちは何を大切にすべきか」を問いかけている。

本書には、神学、歴史、政治、社会運動など多様な分野の講師による講演が収められている。全体を通して浮かび上がるのは、暴力によって平和を実現することはできないという確信である。国家や民族の対立が深まり、「力による抑止」が現実的な選択肢として語られる時代にあつて、



「戦争の時代」にしない
ために

非暴力・平和主義を求めて
日本クリスチャンアカデミー
関西セミナーハウス活動セン
ター編



戦争を防ぐとは何か、平和とは何かという根本的な問いを、信仰の視点から考え直そうとしている。とりわけ大国主義がせめぎ合う国際情勢の中で、平和を構築することの困難さが浮き彫りになっている。

中でも印象的なのは、「対話」を諦めない姿勢である。対話は、論破したり相手に迎合したりすることではなく、相手を尊重し、理解しようと努め、こちらの考えも伝える試みである。個人レベルでは会話、国家レベルでは外交とする「対話」の営みは、恐怖や不安が渦巻く状況の中でも、さざ波のように広がり、紛争を防ぐ文化を育む。講演者たちは、戦争を止めることは政治家や軍事力だけに委ねられるものではないと指摘し、私たち市民や教会が果たす役割の重要性を強調する。

また、旧約聖書の預言者エレミヤとイザヤに学ぶ章では、

非戦の心を単なる反戦論としてではなく、他者の身代わりとなる神の愛に基づく生き方として示す。私たち一人ひとりがこの預言者に学び、首を垂れる群れが広がっていくところに、真の平和が訪れるという視点は、キリスト者に深く響く。

さらに、歴史的な非暴力の系譜もたどられ、再洗礼派やメノナイトからキング牧師まで、非暴力を個人の姿勢として示すだけでなく、戦争を行う権力者にも問いかける信仰の行動として描かれる。韓国の民衆（シアル）の主体性や宗教の役割、国際的な協力（民際）も含め、多層的に平和構築の可能性を考える構成は、本書の大きな特徴である。それは同時に、平和が理念にとどまらず、歴史の中で模索され続けてきた実践であることを示している。

本書を読み終えたとき、近年、非暴力によって平和をつくり出そうとする現場で起きた痛ましい出来事を思わずにはいられない。苦しい現実のただ中にあっても、対話と非暴力を模索し続ける人びとの歩みがある。その姿は、暴力の連鎖に抗して平和を求める営みの尊さと、その困難さの双方を私たちに示している。

再び戦争の時代にしないために、言葉を尽くし、対話を重ね、非暴力の道を歩み続けること。それこそ教会に託された責任として、本書は静かに、しかし確かに私たちに訴えている。その問いは、私たち一人ひとりの生き方に静かに向けられているのである。

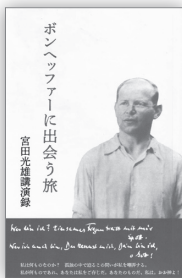
（にしはら・みかこ）日本聖公会正義と平和委員会憲法プロジェクト長、NCC副議長

（A5判・二四六頁・定価一六五〇円・キリスト新聞社）

ボンヘッファーに出会う旅

宮田光雄講演録

60年に及ぶ著者のボンヘッファー研究の道程を回顧し、ボンヘッファーの今日的意義に説き及ぶ。
また付論「ポリフォニーとしての生——ボンヘッファーにおける愛の構造」と初公開の写真資料も収録。



定価 1,100円（税込）

エッセイの木

—本と雑貨の店—

〒980-0012

仙台市青葉区錦町1丁目13-6
エマオビル1階



022-223-2736

shop@essainoki.jp

発行：(株) CBS 仙台

「神の言葉か？ 人間の言葉か？」

この問いに悩む人への一冊

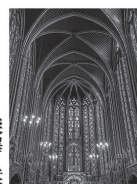
〈評者〉奥田知志

聖書を読み、聖書を語る。それを長く続けてきた。それは対話だった。誰との対話か。当然、聖書であり、登場人物であり、著者だった。何より大切だったのは目の前の人であり、同時代を生きる人々の現実だった。後者が抜けると説教は「聖書解説」で終わり、前者が抜けると「自己主張」で終わる。私は両者の間で彷徨してきたように思う。

K・バルトは「聖書の真理をあなたがたが知りたいと思うのなら、新聞をよく読め。この世の出来事の真相を知りたいと思うならば聖書をよく読め」と言った。聖書は普遍的真理を説く文章であるように見えるが、イエスにせよ、著者にせよ、「時事」の渦中で悩み、考え、「歩き回って善い業を行」（本書42ページ）い、語った。聖書は神の言ことばが肉に宿ったのみならず、人を介することにおいて「受肉」しことばてしまっている。善い業だけでなく、矛盾や身勝手、偏見

さえ含んでしまう。だから金科玉条のごとく扱うことはできない。「無謬説（聖書には誤りはない）」という極端な話でなくとも「聖書にはいいことが書いてあるはず」と無理くり説明する。だが無理がある。本書の帯には「神の言葉か？ 人間の言葉か？」と刺激的な言葉が並ぶが、私たちは両者の上で股裂き状態のまま聖書を読むしかない。「排外主義や軍国主義の嵐が吹き、格差は拡大し、あらゆる分野での分断と対立が深まる中で、社会全体の持続可能性がますます失われつつある昨今。このまま行ったら世の中どうなってしまうんだろう」（3ページ）との問いがエフエソ書を読む視座となっている。だから、ちゃんと聖書を読んではしいと著者は言う。この「ちゃんと」はなるべく丁寧なギリシャ語原典に当たることを意味する。本書に登場する新解釈ともいえるべき釈義に圧倒される。今さら「エ

手紙を読もう
エフエソの信徒への
神の極彩色の世界



THAKKAM, S. S.
深澤 奨

エフエソの信徒への
手紙を読もう
神の極彩色の世界
深澤 奨著



フエツってこんなにおもしろかったのか」と思われる。

ただ、「原典に当たる」としても「正解」などない。すべては「選択的釈義」に過ぎない。では、著者は何をもって選択するのか。それは現実に対する「問い」だと思う。「それがないと聖書は読めないですよ」と教えてくれている。

前半は、「イエス・キリストをくさび石として一つに結び合わされた教会を作ること……教会は神の極彩色に彩られた創造のみ業とその精神を世に証しする光榮ある務めを果たすことができる……現実とは」と、相変わらず教会の中にも差別が横行……けれどそれを見て、落胆するな」(70〜71ページ)がテーマとなっている。排外主義の時代に読むべき書である。「くさび石」の解釈は秀逸。

しかし後半。「聖書に書いてあることはすべて誤りなき

神のことばであるという信仰を僕は残念ながら持ち合わせていません……とても神のことばとしては受け入れがたいことがたくさん書かれています……それらすべてをありがたい神さまのことばとして感謝して受け止めることは、神さまの御心とは反対」(121〜122ページ)だと指摘。こんな正直な注解書があったらうか。すばらしい。この矛盾に苦勞してきた人に読んでほしい。

「イエスなら、どうおっしゃったろうか」(129ページ)。著者は問い続けている。答えはない。ないから良い。現実との対話の中、尽きない問答が繰り返される。聖書を読むとは、語るとは、そのような生の営みに他ならない。それを示す本書に心から感謝したい。

(おくだ・とし 日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師)
(四六判・一六〇頁・定価一九八〇円・日本キリスト教団出版局)

アモス書を読もう

正義を大河の
ように流れさせよ

並木浩一



預言者アモスの言葉に端を発して成立したアモス書は、社会的不正義と人間感覚の喪失を鋭く指摘し、正義と公正こそ神の重大な関心事であると語る。著者による私訳と詳細な解説を通して、聖書のことばが持つ多層性と現代性が深く響く。

四六判 並製・184頁・定価2420円

エフエソの信徒への手紙を読もう

神の極彩色の世界

深澤 奨



キリストにおける多様性と一致がテーマのエフエソ書。対立する教会がキリストによつて結ばれ、「神の極彩色の知恵」を証しする共同体として歩むよう促す、現代の社会と教会への手紙を斬新に読み解く。

四六判 並製・160頁・定価1980円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18

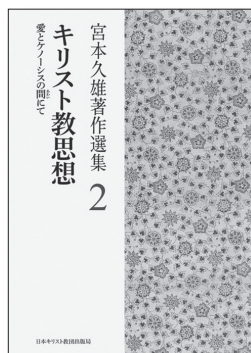
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457

E-mail: eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)

<https://bp-uccj.jp>

教父を通じてキリストに出会う

《評者》 袴田 玲



宮本久雄著作選集 2
キリスト教思想
愛とケノーシスの間にて
宮本久雄著



本書は、日本キリスト教団出版局より刊行された宮本久雄著作選集（全3巻）の第2巻にあたる。著者・宮本久雄については、今更詳述する必要もないだろう。本書は著者の聖書解釈やパウロ論が示される第1巻につづき、ニュツサのグレゴリオス、擬ディオニュシオス、アウグスティヌス、トマス・アキナス、マイスター・エックハルトら東西教父らの思索に基づきつつ、神の「脱在」を中心として著者自らが新たな存在論（エヒエロギア）を構築する書となっている。

……と、このように紹介すると、「何やらすごい著者による何やら難しい書物」という印象をもたれる方もいるかもしれない。確かに、本書で扱われる教父のテキストの幅広さや深さは否定しようもないが、本書の（そしてその人生の）全体を通じて著者がしようとしていることは極めて

単純明快である。それは、著者自身の言葉を借りるならば、「神の御子、受肉した御言イエス・キリストとの出会いを求めた旅」（本書「あとがき」より）である。

その長く豊かな旅路において、筆者が視点を定めてそれさなない一点があるとすれば、それは人間の受動性であり、またその受動性ゆえにこそ、他者に、そして神に、披かれゆくという人間の可能性であろう。この受動性へのまなざしが、ギリシア教父の思索や東方キリスト教の修道思想の中心にある人間の身体性（あるいは、「精神と身体の合一的一体」たる霊的感觉）に対する洞察となり（第1、2章）、また一方ではニュツサのグレゴリオス、アウグスティヌス、マイスター・エックハルトにおける、人間存在そのものの受動性（瞬時的貸与性）や神体験の受動性（自己中心性からの解放）、さらには協働態性への着目となっ

て(第3、4、6、8、9章)、読者を教父たちの思索の奥へ奥へと誘う。難解で知られる擬ディオニュシオスの否定表現に取り組む第5章においても、「否定詞を用いる人がす、で、にその使用において全体〔すなわち神〕と何らかの仕方では出会う、て、いる」という事実」(傍点と「」内の補いは引用者による。以下も同様)に基づき、「自己が見出した」と思った真理をさらに問い直しうる」という人間の自由としてそれは理解される。

中でも特筆すべきは、トマス・アクィナスのグラチア(恵み)論を扱う第8章であろう。若かりし頃、筆者は押田成人神父の導きによって「存在する一切の一つ一つのかげがえのなさを観想しているトマスの境涯を知った」(「あとがき」という。その筆者が、「出会い」「出くわし」等々の言葉を用いつつ強調してやまないのは、古代ギリシア哲学から近代の人間観に至るまでも重視された意志的・理性的自我性(自己決定する人間の能力や意識)が撃たれ、動揺し、破れるその一点にこそ、グラチアの、すなわち神の、強力な働きが経験されるといふ事態である。「他人を赦す」という、理屈で考えれば不可能でしかない行為が可能となるのも、そのようにして「グラチアの場」たりえた人間に到来する出来事として理解される。ここに

は、有限で、ちっぽけで、思いのままにならない「この私」を生きるすべての人を、「神との出会いの場」として包み込む愛のまなざしが存在する。こんなに温かく希望のあるトマス論を、私は知らない。

宮本が捉えるこのトマスの愛のまなざしは、私にとっての恩師である筆者・宮本自身のまなざしに重なる。大学の授業で、学生たちのどんなに無知で愚かな質問にも、丁寧に、温かく、ときにジョークを交えつつ、身近な例をもって説明することを厭わない教師としての姿。研究会で、一緒に教父のテキストにかじりつきながら、テキストが示す神秘への披かれに、鳥肌の立つような感動を共有した研究者としての姿。旅と、美味しいお酒と食べ物を楽しむ、人の弱さにとことん付き合ってくれる人生の先輩としての姿。今振り返ってみると、そのどの場面にも、愛が、すなわち神が、臨在していたように思う。本書を手にする読者の銘々が、宮本の思索を通じて教父たちに出会い、さらに彼らが出会ったイエス・キリストに出会われることを祈る。

(はかまだ・れい＝岡山大学文学部教授)

(A5判・二九〇頁・定価四六二〇円・日本キリスト教団出版局)

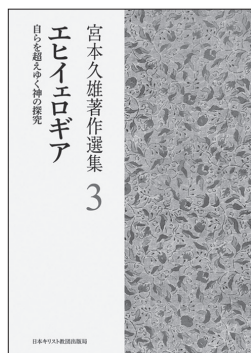
刮目せよ！ これからの キリスト教的神論に欠かせぬ一書

〈評者〉 阿部善彦

著者の人柄は本選集に詳しいので略歴のみ記す。一九四五年生まれ。現在、カトリック渋谷教会主任司祭、東京純心大学教授を兼務し、今も私の何十倍も働く（東京大学名誉教授、元上智大学神学部教授）。研究は聖書学、神学、哲学にわたり国内外で業績多数、育てた学者多数。トマス・アクイナス、そして、私が研究しているマイスター・エックハルトと同じ、ドミニコ会士。卓越した修道者・学者として国際的に高い評価を受け、日本人として史上初の「Sacrae Theologiae Magister」の称号をドミニコ会より授与される。

本書は宮本の思想的エッセンスたる「エヒイエロギア」を、思索の原点と展開とともに鮮やかに描き出す。本書を世に出した編集者、出版社の先見と功績も称えたい。

宮本の思索の原点はイエスである。若き日から今日まで



宮本久雄著作選集 3
エヒイエロギア
自らを超えゆく神の探究
宮本久雄著



一貫して、宮本は、イエスがご自分を同じ者とされた小さき者の、その一人ひとりのなかにイエスを見出す探求の道を歩き通す。そして、今、その一筋の道に「エヒイエロギア」が浮かび上がる。東京大学で哲学に取り組み、ドミニコ会に入会後は諸国遍歴遊学し、聖書と神学を修めるが、その際にまず取り組んだのが、イエスを通じて出会ったヘブライ語聖書の中の神である。本書のタイトルにある「エヒイエロギア」の「エヒイエ」（宮本はこれを「脱在」とする）は、出エジプト記3章14節のヘブライ語原文「エヒイエ・アシエル・エヒイエ」（ありてある者）という神啓示による。

たいてい「存在」（ラテン語でエッセ）と取られるこの語を基盤とするトミズムの神学がトリエント公会議以降の司祭養成をなお支配する時代に、若き日の宮本は、ドミニ

コ会の先達、遊行の巡礼者・押田成人（一九二二～二〇〇三）より、「存在」に躓いた西洋神学が生み出す無数のトマスのエピゴーネンに成り果てぬよう教えられた。押田のトマス読解は、入会以前より『神学大全』精読を続けた宮本の歩みを照らす。宮本の「エヒイエロギア」は絶望的に分厚い近代トミズム伝統の桎梏からトマス本来の「存在」理解を解き放つ悪戦苦闘でもある。同じく「存在」の近代神論の限界に着眼したのが有賀鐵太郎（一八九九～一九七七）であり、「エヒイエ」により「ハヤトロギア」を提唱し教理史の面目を一新した。

この方面は各自の本書実見・味読に委ね、本書の白眉、良寛・宮澤賢治・石牟礼道子論に言及し攪筆したい。これらは「エヒイエロギアの体现者」論をなす。本書副題の通

り「エヒイエ」（脱在）とは「自らを超えゆく神」の存在動体。脱自して世界を造り、自らと同じ姿を人に与え、手ずから肉をととのえ、直接の息吹で生かし、ついには最愛のひとり子の受肉による救済という途方もない自己無化を通じて、全人類を同じ命を分け合う神の兄弟姉妹の相生の内部にまると包み込む、この創造と救済の全史を貫き「自らを超えゆく神」＝「エヒイエ」（脱在）として今この瞬間も啓示し続ける神の存在動体が、良寛・宮澤賢治・石牟礼道子のいのちと言葉の隅々に鮮明に体现・啓示されていることに、我々は宮本の求道的読解を通じて出会う。刮目されたい。

（あべ・よしひこ＝立教大学文学部キリスト教学科教授
（A5判・三一四頁・定価四六二〇円・日本キリスト教団出版局）

サンタクロースのさいしよのさいしよ 聖ニコラウスの ふしぎなちから

サンタクロースはトルコうまれ!?

鈴木郁子作
吉田稔美画



1800年ほど前にいまのトルコに生まれ、サンタクロースのもとなったキリスト教の聖人ニコラウス。いったいどんな不思議な力で人びとを助けたのでしょうか。聖ニコラウスにまつわるさまざまな伝説をめぐる物語絵本。

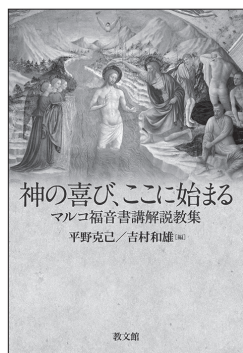
B5変型判・32頁・1980円

玉川大学出版部

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1
www.tamagawa-up.jp <価格税込>

深い黙想から語られる 喜びの物語

〈評者〉 朝岡 勝



神の喜び、ここに始まる

マルコ福音書講解説教集

平野克己、吉村和雄編



本書は、私たち日本の教会に、日本の教会を建て上げる神学に、その最前線を担う実践神学、とりわけみことばに仕える説教に、そして何よりもみことばを説き明かす説教者たちに多大な貢献を果たされた加藤常昭先生を記念する説教集です。神学的著述としての「説教」の意義を繰り返し語り語られた加藤先生を記念して、加藤先生のもとで説教の研鑽を続けて来られた希有な神学運動である「説教塾」によって、五冊目となる説教集がこうして編まれたことを意義深く思います。

本書ではマルコ福音書の全体（但し一六章末尾の二つの追加分を除く）が、四六名の説教者により五一篇の説教として説き明かされています。四六名の内訳は二三の教団教派と三つの単立教会に及び、四四人の牧師・教師（男性三名、女性八名）と二人の信徒による説教が収められています。

ます。こうした点にも、「三〇を超える教派からおよそ二五〇人の説教者が加わる」（四頁）説教塾運動の拡がり豊かさの一端が反映していると言えるでしょう。

バラエティに富んだ説教者たちによる連続講解説教でありながら、そこに共通して存在する説教の「かたち」あるいは「テイスト」が読み取れるところにも、本書のユニークな特徴が現れています。そこには「マルコ福音書」が発するメッセージの一貫性はもちろんのこと、説教者固有の実存、それぞれの置かれた教会的現実、目の前の聴衆の姿に違いはあるものの、説教塾で学ばれた説教者たちが共有している説教の「理解」と「作法」が見えてきます。それは評者が読み取ったところでは、「あとがき」で徳田宣義先生が触れておられる「第一の黙想」と「第二の黙想」の徹底した修練と、それによって獲得された黙想の実践が、

一つ一つの説教の全体に及ぼしている濃厚な影響です。

いわゆる「序論」・「本論」・「結論」という伝統的な定型から離れて、「聴衆」の黙想を重ねながらみことばの現実と聴き手の現実が重ねられていく語り口、第一の黙想で聴き取ったテキストの核心から、釈義的考察や神学的黙想によって広げられ、深められていく講解の作法、それらが相俟って、鉛筆書きのデッサン画がやがて輪郭が立ち上がり、色彩を帯びて一枚の絵画として描き出されるように、あるいは水の中に注がれる絵の具がしだいに渦を巻いて、やがて紙に染み込んでいくマール画のように、みことばが生き生きと目の前に立ち現れてくるのです。

それだけに、五一篇の説教のうち約半数近い二一篇が「未発表」であることはやや意外でした。本書編集の背景を存じ上げないので的外れなことかもしれませんが、それは本書刊行のために準備され書き下ろされた説教なのだろうと想像しつつ、やはり生きたみことばの聴き手たちに向けて実際に語られた説教であるか否かは、その説教に決定的な影響を与えられるからです。

最後に、いくつもの心に残ることばの中から、「説教」を説教たらしめる核心を言い表す池田慎平牧師の次のことばが評者の心に深く響いています。

「牧師が説教で語ることは、私たちが礼拝全体を通して受け止めようとしていることは、いつだって神の『私だ』という力強い御声を聴くことであります。今、ここに神がいてくださる。その確信があれば、この愛の一言があれば、私は、私たちは生きていくことができるのです」（二〇二頁）。

（あさおか・まさる 〳日本同盟基督教団多磨教会牧師）

（四六判・五六八頁・定価三一九〇円・教文館）

■ヨベル

ルカの福音書説教集 4

完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った

岩本遠億著

「目から鱗」ってこういうことなんだ！愛する力、自分自身を離れて一人の人を愛するいのち、それこそが聖霊！好評のシリーズ最終巻。続刊として、『使徒言行録』が全6巻の予定で刊行されます。ご期待ください。

新書判・196頁・定価1540円

マルコの福音書連続説教

神の子、イエス・キリストの福音

松本 充著

「イエス・キリストの福音のはじめ」と真正面から書き始めた真諦に迫る。聖書を原語で味わい、文脈を読み、テキスト独自の視点を大切に。何よりも御言葉の前に自らを立たせ、ひれ伏すようにして深奥のメッセージを探り、自分を探らせる。マルコ福音書説教の全体像を完成。

新書判・200頁・定価1870円

■新教出版社

私は告白する、私の神を

神を訊ね求めた36人の変奏曲

長尾 優著

既成のキリスト教の枠に収まらないが、真剣に神を訊ね求めた古今東西36人の足跡を辿る珠玉のエッセイ集。辻邦生、チャイコフスキー、アーレント、山本周五郎等々、多彩な人々の織りなす求道の歩みは私たちに信仰とは何かを問いかける。『福音と世界』好評連載を大幅に増補して単行本化。

四六判・254頁・予価2860円

INFORMATION

近刊情報

イザヤ書註解Ⅲ

28-39章

ジャン・カルヴァン著

堀江知己訳

イザヤ書註解は一五五一年に出版された。カルヴァンにとつて初めての旧約の註解である。詩篇註解に比肩する膨大な分量であり、邦訳では全五巻予定。改革者がヘブライ語の深い知識に基づいて、どれほど真剣に預言書に取り組んだが如実に伝わってくる。

A5判・560頁・予価7590円

■教文館

信徒のための信仰入門

—三要件と日本基督教団信仰告白を学ぶ—

近藤勝彦著

キリスト教教理・霊性・倫理を凝縮した、信仰生活に寄り添う確かな道しるべ。信仰を求める人にも、信仰を深めたい人にも！

B6判・276頁・定価2530円

宗教二世、教会二世

自分を取り戻すための心理カウンセリング

河村從彦著

「宗教毒親」にならない、苦しめられない。自分で考え、自分が決めるためのコツがいっぱい詰まっています」(精神科医 香山リカ)

四六判・220頁・定価2200円

キリスト教神学の200年

福音と文化をめぐる一つの旅行記

H・ベルコフ著 渡部 満訳

福音と近代思想は共存できるか？ ドイツやオランダのみならず、英国、アメリカ、さらにはカトリック神学までを視野に収めた、近代神学200年の全体像。

A5判・488頁・定価6930円

書店名	郵便番号	住 所	電 話	フ ァ ャ ッ ク ス	U R L	メ ー ル	郵便振替
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用			02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://essainoki.jp/	shop@essainoki.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中区新堀3-2 千華クリスチャセンビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス東京	169-0051	新橋区早稲田23-18A/A00ビル2F(通称専門)	03-3203-4137	03-3203-4186	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区関口1-44-4京屋関口ビル日本館内(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkhan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tokiglobe.jp/~yokohama-js/index.html	sksch@mv.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市中区大須1-16 日本キリスト教団大須教会内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.cococan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
バイブルハウス京都	606-0007	京都市中京区錦江22 日本基督教団平野教会(外販専門)	090-5138-7020	075-320-1844		kyoto-jbs@bible.or.jp	01010-2-594
バイブルハウス堺	591-8023	堺市北区中百舌鳥町2-87 チャペルこつじ2F	072-255-4970	075-255-4971		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
大阪キリスト教書店	552-0003	大阪市港区薄野2-18 港ルーテル教会1F	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖燈社)	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0025	神戸市中央区港地145-12 神戸駅前ATビル401	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkhan.co.jp	00170-2-421390
広聖聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
バイブルハウス熊本	862-0971	熊本市中央区大江4-20-23	096-372-3503	共用		kumamoto-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販売部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2026年7月号

特集Ⅱテクノロジーと救済

寄稿者Ⅱ 杉田俊介、原島大輔、清水知子、西條玲奈、山本泰三、栗原 康

◆書評 ウォルフ『排斥と抱擁』（榎本空）
◆追悼 ハーバーマスと宗教（後藤正英） ◆連載 スレズレなるままに（川口弾）、古代イスラエル史入門（日高貴士郎）、人物・日本キリスト教史（戒能信生）、ばやし牧師のさすらい説教録（富田正樹）、異端者の世界航海（福岡揚） 他

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から



今頃になってヘンリ・ナウエンの著作を読み始めている。二十代の頃は牧師や学者の神学的な話題についていけるよう、がむしやりに流行りの神学書を読んでいた。アラサーを脱しようとする頃、子どもを授かった。それに伴い時間も心の余裕も消え、しばらく読書から遠ざかっていた。一方、頭の中で自分の人生を振り返ることが多くなった。これまで何をしてきたのか。何ができたのか。何を手に入れたのか、自分は何者かになれたのか。

本誌1月号の特集をきっかけに、本棚にあったナウエンの『静まりから生まれるもの』『放蕩息子の子の帰郷』を読んだ。その間、邦訳の編集者との出会いもあり、「もう少し読んでみるか」と、今は『ローマの道化師』『新しい生き

予告

本のひろば

2026年8月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）岡田仁「人間解放の教育」
（書評）富田正樹著『戸惑いながら信じてる50』、芝恭子訳著『楓の記憶、紡ぐ言葉』、藤掛順一著『活けるキリストの現実』、ミロスラフ・ヴォルフ著『排斥と抱擁』、洪伊杓著『帝国の神道理解とキリスト教』、久野牧著『神の目にあなたは貴い』 他

方』をゆつくり読んでいる。学生時代、ナウエンの著作に親しんでいた友もいたが、当時の私には何が良いかさっぱりだった。今ですら、共同体形成につなげる彼の霊性論はいまいち腑に落ちないし、『放蕩息子の子の帰郷』の結び、父のようになる招きなんかは、率直に言って「No thank you」だ。そんな萎れた大人にはなりたくない、という思いが噴出してくる。ただ、「わたしはこうだった」と隣で同じ方向を見ながら話してくれる古い友のように語る言葉に、いわゆる神学書にはない不思議な安らぎを感じている。別段、何者にもなれなかった自分を見つめる時、著作から感じる彼の眼差しは、「評価される人間にならねば」という内側の思いと焦りを知っているようだ。彼の視線を追いながら、「神の前に自分が何者であるか」を思い出す長い旅の出発点に立ったような気がしている。（桑島）

金子晴勇〔著〕キリスト教思想史の例話集

IV 愛のかたち

〔全6巻第4回配本〕

話題!



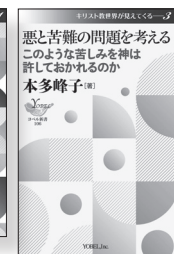
書棚の古今東西の文学を、もう一度読み直したくなる!
 〈アモルとプシケ〉、〈トリスタンとイゾー〉に込められた愛の物語と、キリスト教的な愛は、どう異なり、どう結びつき、どう秩序づけられてきたのか。ヨーロッパ思想史を流れる幾筋もの愛の系譜を丹念に辿って見えてきたものとは?

新書判・二六四頁・一五四〇円

本多峰子〔著〕このような苦しみを神は許しておかれるのか

3 悪と苦難の問題を考える

反響!



古来「善なる神に創造されたはずのこの世界になぜ悪があるのか、世界はなぜ苦悩に満ちているのか」という問いは人々を悩ませ、「神義論」という分野における論議が烈しく繰り広げられてきた。本書はその格闘の歴史を研究者視点でつまびらかにしつつ、現代に生きる一キリスト者として静かな着地点を誠実に探る。

新書判・一九二頁・一五四〇円

待望の3部作完結!

1 イエスとの出会いと救い

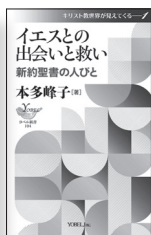
新約聖書の人びと

新書判・一七六頁・一五四〇円

2 イエスの語るたとえ

今、あなたはどうか生きるか

新書判・一九六頁・一五四〇円



朴チヨンミン〔著〕

主イエスと共に歩む旅路

西福岡キリスト教会牧師に赴任し、週報に掲載したコラムが一冊の本になった。現代社会の最前線に身を置いた



ヒリヒリした肌感覚から……
 「キリスト者の人生はイエスと共に歩む旅路である」という〈共に〉の視点から紡がれた神のことば。

四六判・二七二頁・一八七〇円

松木充〔著〕マルコの福音書連続説教

神の子、イエス・キリストの福音

「イエス・キリストの福音のはじめ」と真正面から書き始めた真諦に迫る。聖書を原語で味わい、文脈を読み、テキスト独自の視点を大切にする。何よりも御言葉の前に自らを立たせ、ひれ伏すようにして深奥のメッセージを探り、自分を探らせる。マルコ福音書説教の全体像を完成。



四六判・四一六頁・一八七〇円

岩本遠億〔著〕ルカの福音書説教集4

完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った

「目から鱗」ってこういうことなんだ! 愛する力、自分自身を離れて一人の人を愛するいのち、それこそが聖霊!



新書判・二〇〇頁・一三二〇円

信徒のための信仰入門

三要文と日本基督教団信仰告白を学ぶ

近藤勝彦〔著〕 使徒信条・十戒・主の祈りの手引き



キリスト教信仰の核心をなす〈三要文〉を、聖書に即して丁寧に読み解く。また、「日本基督教団信仰告白」を通して、現代日本の教会に生きる信仰の姿を問い直す。キリスト教教理・霊性・倫理を凝縮した、信仰生活に寄り添う確かな道しるべ。信仰を求める人にも、信仰を深めたい人にも！

●B6判・276頁・定価2,530円

宗教二世、教会二世

自分を取り戻すための心理カウンセリング

河村従彦〔著〕



「宗教毒親」にならない、苦しめられない。自分で考え、自分が決めるためのコツがいっぱい詰まっています。

（精神科医 香山リカ）

教えどおりに信じた信仰、抑えてきた自分らしさ……気づいた私はどうしたらいいの？牧師・臨床心理士の著者が人知れず悩むあなたに贈る、心からのエール。

●四六判・220頁・定価2,200円

6月の新刊 ●価格表示は税込

教文館創業140年
記念限定復刊！



ギリシア語新約聖書訳義事典〔全巻セット縮刷版〕

H・バルツ、G・シュナイダー〔編〕 荒井 猷、H・J・マルクス〔監修〕

新約聖書本文に現れる全ギリシア語語彙の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす比類なき事典として、刊行以来多くの方々にご愛用いただいていたロングセラーを小型化・軽量化。

●A5判・1788頁・定価69,300円

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549 (出版部直通) 《呈・図書目録》

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は《e-shop 教文館》
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで！



本のひろば.com



一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
二〇二六年七月一日発行（毎月一回一日発行）
本のひろば 第八十三号 二〇二六年七月号

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口一-四四-四 一般財団法人キリスト教文書センター
電話 03-3316-6510 振替 0170-511679
発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷（株）
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話 03-3316-0156

定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分二〇〇円（送料共）